

スポーツ界における適切なボトムアップ指導

1200410 大原 悠太郎

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. はじめに

現在、スポーツ界で暴力や暴言、体罰が問題となっている。大阪市立桜ノ宮高校バスケットボール部顧問による体罰（2012年）、愛知県立豊川高校陸上部顧問による体罰やしごき（2013年）、全日本柔道連盟女子柔道日本代表監督による暴力・暴言（2013年）、天理大学柔道部の上級生による暴力（2013年）等、暴力、暴言、体罰問題が横行しており、その都度メディアに取り上げられ世間を騒がせている。

そのような中、2013年4月25日、日本体育協会、日本オリンピック委員会（JOC）、日本障がい者スポーツ協会、全国高等学校体育連盟、日本中学校体育連盟の5団体が、「スポーツ界における暴力行為等根絶宣言」を採択した。これは、「殴る、蹴る、突き飛ばす」の他、「言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ」などを「暴力行為」と定義し、日本のスポーツ界から暴力行為を根絶するという頑固な意志を表明したものだ。

しかし、このように体罰や暴力行為を根絶する動きがあるにもかかわらず、体罰や暴力行為は後を絶たない。2018年5月には、大学アメリカンフットボールにおける悪質なタックル問題が世間を騒がせた。選手による過度のラフプレーは、全て監督、コーチによる指示によるものと明らかになった。そこには、監督主導の「トップダウン指導」が関係していると考えられている。こうした勝利至上主義に基づくこと多い「トップダウン指導」は、暴力、暴言、体罰等、重大な問題を引き起こしてしまう恐れがある。中村（2019）によると勝利主義と体罰は密接に関わっていると記されている。指導目的が勝つことにある場合、勝ちにこだわりすぎて、思うような結果が出ない時や選手の態度に苛立った時に体罰は起きてしまう。また、体罰を受けて育った指導者はその体験をベースに体罰を正当化し、勝つための理由として体罰を行う例が多く、悪循環になっている。監督主導の「トップダウン指導」には、短期的にバラバラの組織を1つの目標に向かわせるといった良い面もあるが、近年では、選手主導の「ボトムア

ップ指導」が注目を集めている。選手の自主性を尊重し、「考える力」を養うこの指導は、体罰やしごき等、従来の指導とはかけ離れており、社会に広がりつつある。

本研究では、スポーツ指導においてボトムアップ指導がどのように機能しているのか考え適切な指導方法を見出す。

2. 背景

中村（2019）は体罰の経緯について以下のように述べている。戦後、人口動態の急激な変化や不十分なスポーツ施設といった環境の中で、勝利を最優先に掲げて効率的に活動することを目的にスポーツが行われた。戦後ということで軍隊帰りの人間が多く、勝利主義と上下関係という軍隊と同じ組織構造を引き継いだ体育会系のクラブでは、その影響から軍隊内で行われていた体罰が横行した。勝利最優先のマネジメント手法は、貧しい環境の中で短期的に競技レベルが向上したという良い側面と、体罰やしごきにより退部者の続出や、控え選手が苦しい思いをしたという悪い側面があった。

著者自身も高校時代、勝利至上主義を掲げる組織に所属していた。最終学年時にはキャプテンを務めていたが、監督の言うとおりにできないと殴られ、ミスを犯してしまうと何時間もの間、直立不動や正座等の罰則を与えられた。技術向上の理由ではなく、指導者の思い通りにいかないことからの怒りをぶつけられた。こうした体験が本研究の動機につながった。

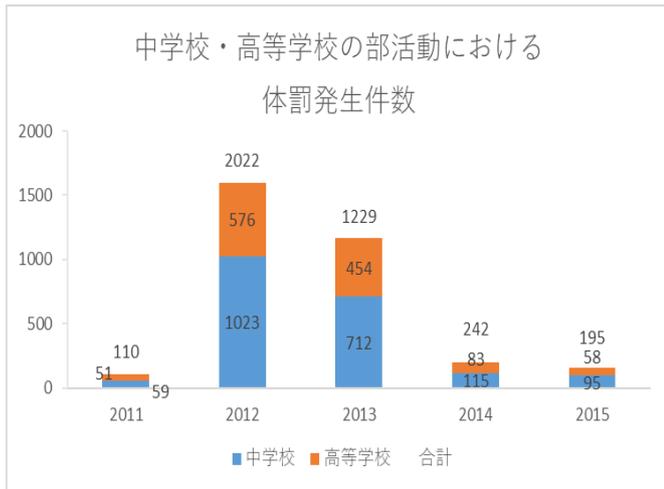


図1 中学校・高等学校の部活動における体罰発生件数の推移 (スポーツ庁 2016)

図1は、2011年から2015年の中学校・高等学校の部活動における体罰の発生状況をまとめたものである(スポーツ庁, 2016)。体罰は、2012年をピークに減少している。特に2013年から2014年にかけて、件数は大幅に減少しているが、これは、2012年の文部科学省の緊急調査により、体罰を行った教員が大量に処分されたことが要因として挙げられている。しかし、いまだに年間で200件の体罰が発生しており部活動指導の改善が必要である。

概要にも記したが、体罰と勝利主義は密接にかかわっているとされている。日本が勝利至上主義になりがちなのは、トーナメント制の大会がジュニア期から存在することが影響していると考えられている。勝利を目指すこと自体は悪いことではないが、一度負けたら終わりというトーナメント制では、勝利を優先に戦う指導者が多くなる。しかし、海外では全くシステムが違う。海外の指導法に注目すると、例えば、日本と同じく野球が盛んな中南米において、選手に伸び伸び自由にプレーをさせる指導スタイルが確立されている。そこには体罰が存在せず、放任主義で選手に細かい技術指導はしない。日本とは全く違う指導スタイルがそこには存在する(筒香 2017)。

表2 中南米諸国の人口に対する現役メジャーリーガー率 (筒香 2017)

国名	人口	現役メジャーリーガー	日本と同じ人口に換算した場合
ドミニカ共和国	1017万人	151人	1781人
ベネズエラ	3062万人	110人	431人
キュラソー島	14万人	5人	4285人
日本	1億2642万人	9人	—

表2は2017年のドミニカ共和国、ベネズエラ、キュラソー島、日本の人口、現役メジャーリーガー数、日本と同じ人口に換算した場合のそれぞれの国のメジャーリーガーの数を表したものである。中南米の国々は、人口が日本と比べて圧倒的に少ないにもかかわらず、現役メジャーリーガーが圧倒的に多いことが分かる。これは、メジャーリーグがアカデミーを展開しているという大きな育成システムの影響が考えられるが、選手の自主性を尊重し、選手が野球を心から楽しめる環境づくりをし、選手を大事に育てる意識が指導法に表れていることも影響していると考えられる。つまり、トップレベル選手の輩出数にも指導法が関係している可能性がある。実際に勝利至上主義の考えがあまり存在しない国と日本を比べると圧倒的な差が生まれているのが現実である。

3. 目的

本研究の目的は、海外の選手育成や国内のボトムアップ指導で注目を集めている指導者の指導法を調べ比較し、共通点を見つけ、どのような指導が適切なのかを考察する。さらに、それぞれの指導において、ボトムアップ指導がどのように機能しているのか考察する。

4. 研究方法

本研究では、この目的を達成するために、三つの調査を行った。

一つ目は、実際にブラジル、オーストラリアの高校生の野球チームを訪問し、指導方法についてヒアリング調査を行った。調査対象は、ブラジルは、クラブチームの野球指導者、オーストラリアは、クラブチームの野球指導者と現役高校野

球選手であった。調査日時は、ブラジルは、2018年12月6～16日、オーストラリアは、2019年12月27日であった。調査の枠組みとしては、以下の3点に着目した。

- ① 体罰は、存在するのか
- ② 海外から見た、日本の指導の良いところ
- ③ トップダウン指導とボトムアップ指導のバランス

2つ目は、「ラテンアメリカ野球から学ぶ選手指導・育成研修会」に参加し講師に対するヒアリング調査を行った。調査日時は2019年2月2日であった。調査の枠組みとしては、以下の3点に着目した。

- ① 海外から見た、日本の指導の良い点、悪い点
- ② トップダウン指導とボトムアップ指導のバランス
- ③ 中南米人が考える良い指導者とは

3つ目は、近年、日本で注目を集めておりボトムアップ指導を採用している指導者の文献調査を行った。

5. 結果

5.1 ブラジルの選手育成

まず、ブラジルの野球は、日系移民の方が野球を広めたという歴史があり指導においても日本の指導に強い結びつきがあるということ分かった。

①体罰が存在するのかについては、体罰は存在しないことが明らかになった。国内4都市（サンパウロ、ロンドリーナ、クリチバ、クイアバ）を訪問したが、いずれの都市でも体罰は存在していない。

②ブラジルから見た日本の指導の良い点については、挨拶ができること、道具を大切にできること、時間を守ることだった。著者は、実際に現地で野球指導の補助を行ったが、集合時間になっても練習会場に来ていない選手も多く存在した。練習後の片付けの際に道具を入れる倉庫を見ても、道具の整頓が日本に比べ徹底できていないと感じた。

③トップダウン指導とボトムアップ指導のバランスについては、トップダウン指導に偏りのある指導であることが明らかになった。日系移民が野球を広めたという背景があり、体

罰は存在しないものの、監督やコーチの意見は絶対であり技術指導において徹底して細部まで指導していた。

5.2 オーストラリアの選手育成

①体罰が存在するのかということについて、体罰は存在しないことが明らかになった。オーストラリア人からすると、選手に対しての暴力行為は考えられないことであり犯罪レベルだと認識されている。

②オーストラリアから見た日本の指導の良い点については、指導に関する情報の量が多いことや指導者が多く存在することが挙げられた。

③トップダウン指導とボトムアップ指導のバランスについては、完全にボトムアップ指導だということが明らかになった。指導者が全て教えることや細かい技術指導は全く存在せず、選手たちに気づかせる指導がメインということだった。また、オーストラリアの野球は組織で勝ちを目指すということより個人のプレーで目立ちたいという選手が多く娯楽としての認識もあった。

5.3 中南米の選手育成

次に、体罰が存在しないと言われている中南米において、①中南米から見た日本の指導の良い点、悪い点について、まず良い点は、道具を大切にすること、時間を守るなどの規律や教養があることであり、悪い点は、選手に対しての体罰が挙げられた。

②トップダウン指導とボトムアップ指導のバランスについては、完全にボトムアップ指導だということが明らかになった。技術指導はあるが細部まで細かく指導するというのではなく、指導者による強制指導もないことが明らかになった。選手たちの気づきや考える機会を増やすことで、そこに向けてのアプローチが非常に重要視されている。

③中南米人が考える良い指導者については、中南米では、チームを勝たせられる指導者が良い指導者ではなく、選手たちが野球を好きとだという気持ちをもたせ、メジャーリーグに育てた指導者が良い指導者とされている。日本では勝利に導く指導者が名将と言われ評価されるが、中南米では、全く異なっている。また、中南米の指導者は選手へのリスペクトの心を持ち、ミスや失敗をしても常にポジティブな声掛け

を続けるということも分かった。

5. 4 日本の選手育成（畑のボトムアップ理論）

日本では、長年トップダウン指導が主流であったが、その中で「ボトムアップ」を機能させるという視点に立って作られた「トップボトムアップ理論」が注目を集めている。この理論を提唱した畑（2017）によると、「トップボトムアップ理論」は上から下への指示や命令の「トップダウン」と下から上への「ボトムアップ」をどちらもバランスよく機能させるという理論である。まずは、トップダウンで組織の基盤の3本柱（量より質の練習、信頼と絆、自主自立の精神）と育成の3本柱（挨拶、返事、後片付け）を教え、次にボトムアップで選手の考えを引き出すようなサポートやアドバイス、提案をして、自分で答えを導き出すための流れを作るというものである。

基礎の3本柱の「量より質の練習」は、効率的に短時間で練習をすることである。「信頼と絆」では、具体的な作業として、二冊の交換ノートを用いて、一冊は練習や試合の反省、感想、もう一冊は、練習のある日や休日の過ごし方を24時間コーディネートし、自主トレーニングや休日の過ごし方や勉強のことについて書く。この交換ノートを活用することで選手との信頼や絆を構築する。「自主自立の精神」とは、選手がチーム運営を行うものであり、選手登録やスターティングメンバー、戦術、一か月の練習計画や一日の練習プランなど、通常監督が行う業務を選手が行うものである。

選手育成の3本柱の「挨拶」は、相手が気持ちの良くなる挨拶を考え、自ら行動できるように促していくものである。「返事」は、「はい」「いいえ」の判断がポイントで、自分の意思をはっきりといえる選手に育てることを意図している。三つ目の「後片付け」とは、整理・整頓・掃除のことを意味しており、身の周りの整理整頓、掃除を行うことで心が整理され小さな変化に気づくことや視野が広がることを意図している

畑氏は、トップボトムアップ指導を通じて選手自らが自分で考えて、自分で判断、行動でき、社会で生き残ることができる人材をつくるということを念頭に置いている。それが、知力、体力、気力、実践力、コミュニケーション力といった社会で必要とされる人間力を磨くことにつながると考えてい

る。

6. 考察

本研究の目的は、スポーツにおける適切な指導法を探る中で、主にボトムアップ指導がどのように機能しているかを明らかにすることであった。そこで、まずは、オーストラリアやブラジル、中南米の指導方法についてヒアリング調査を行った。

ブラジル、オーストラリア、中南米では、体罰が存在しないことがわかった。それぞれの国からみた日本指導の長所に関する共通点は、一貫して道具を大切にすることや、時間を守る、挨拶をするといった規律や教養を指導しているところだった。日本の規律が海外からすると、魅力の一つであることがわかった。一方、日本指導の短所は、体罰や選手に対してのネガティブな発言をしてしまうところだった。トップダウン指導とボトムアップ指導のバランスは、オーストラリア、中南米は、完全ボトムアップ指導であった。一方、ブラジルはトップダウン指導に偏りがある指導法であることがわかった。

次に、日本で注目を集めている「トップボトムアップ理論」に関する文献調査を行った。それは、組織や育成の基盤をトップダウンで指導しその基盤が構築された後は、選手に任せて、選手間で話し合い方向性を決めることや、選手自身で自らの課題を見つけ、その課題解決に向けて指導者はサポートするというボトムアップ指導をするという指導スタイルであった。

本研究を通じて、指導においてすべての状況でボトムアップ指導を用いるのではなく、状況によってトップダウン指導も用いる必要があるということが分かった。特に組織の方向性や基盤が構築されていない状況においては、トップダウン指導を用いることは必要だと考えられる。しかし、岩出（2018）は、この場面のトップダウン指導は、指導者が教え込むのではなく、組織での所属期間の長い選手、いわゆる先輩にあたる選手が指導することであり、監督はその上級生に対してサポートすることが望ましいと主張している。方向性や基盤が構築されれば、後は、選手に任せて組織を運営させるボトムアップ指導が有効ではないかと考える。しかし、指導者は全てを選手に丸投げするのではなく選手との信頼関係

を構築し、しっかりとサポートするということが非常に重要だということが分かった。その中でも選手へのリスペクトの気持ちを持ち続け、ポジティブな声掛けをすることが大切である。また、技術指導においても、選手に答えを教えるのではなく、選手を答えへと導くアドバイスを送り、常に選手が考える状況を作り出すことが大切であるとする。どんな場面でも一番大切なことは、選手が楽しいかどうかであり、指導者は、その気持ちを常に選手に持たせてあげることが重要である。

7. 終わりに

筆者自身も12年間野球を続けてきた中で体罰を受けた時期があった。そして、怒られることや否定されることを避けて萎縮した状態で野球をする時期があった。また、体罰や説教により、潰された選手を多く見てきた。本研究で、ブラジル、オーストラリア、中南米では、体罰は存在しないことが明らかになった。また、オーストラリア、中南米では、完全にボトムアップ指導であるということがわかった。特に中南米では、指導者による強制指導もないことが明らかになった。中南米の指導者は、選手たちが考えることや気づくことが大切で、そこに向けてアプローチをすることが非常に重要だという考え方を持っていることがわかった。日本も海外の指導を取り入れ、勝つことを目的にするのではなく、選手の成長を目的にしていく必要があると考える。

筆者自身は、体罰が存在しない世界になり、選手が伸び伸びとプレーができ、心から楽しいと思える環境を目指したい。

8. 参考文献

1. 中学校・高等学校の部活動における体罰発生件数の推移
[【https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/21/1388097_01.pdf】](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/21/1388097_01.pdf)
2. 岡田龍生 (2019) 「教えすぎない教え」
竹書房
3. 岩出雅之 (2018) 「常勝集団のプリンシプル」
日経BP
4. 筒香嘉智 (2018) 「空に向かってかっ飛ばせ」
文藝春秋
5. 畑喜美夫 (2017) 「チームスポーツに学ぶボトムアップ理論」
カンゼン
6. 公立学校、体罰処分教員952人 3000人減も高水準 2014年度・文科省調査
[【https://www.sankei.com/life/news/151226/lif1512260022-n1.html】](https://www.sankei.com/life/news/151226/lif1512260022-n1.html)
7. 中塚明、体罰問題を日本近代の歴史から考える
[【http://rentai21.com/?p=722】](http://rentai21.com/?p=722)
8. "世界の野球"力戦奮闘ブラジル野球！～日系移民が紡いできた夢～「ブラジル野球の歴史」
[【https://www.japan-baseball.jp/jp/news/press/20181204_1.html】](https://www.japan-baseball.jp/jp/news/press/20181204_1.html)
9. 日大アメフト、危険なタックル問題
読売新聞
[【https://www.yomiuri.co.jp/feature/20180524-OYT8T50002/】](https://www.yomiuri.co.jp/feature/20180524-OYT8T50002/)
10. 「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」について
公益財団法人 日本オリンピック委員会 (2013)
[【https://www.ioc.or.jp/news/detail.html?id=2947】](https://www.ioc.or.jp/news/detail.html?id=2947)
11. 中村哲也 (2019) 体罰・しごき・上下関係「現代スポーツ評論 40 スポーツ団体のガバナンスをめぐって」
p109-118.

